



社会科学研究部報

令和7年9月10日

浜松市教育研究会 社会科学研究部

令和7年度 第2回小学校社会科学研究部 研修会

8月1日(金)の第2回小学校社会科学研究部研修会では、午前は主に天竜地区にて臨地研修、午後は天竜壬生ホールにて実践発表と講演会を行いました。

1 研修①(臨地研修)

<天竜エコテラス>

昨年4月より稼働している天竜エコテラスを見学させていただいた。天竜エコテラスでは、シャフト式と呼ばれる溶融炉を使用しており、処理した際に出るスラグやメタルなどを再利用したり、処理熱を使って発電をしたりしていることを教えていただいた。館内では、実際に稼働の様子を見ることができるだけでなく、プロジェクトマップやARもあり、見えない部分の様子も知ることができた。他にも、天竜エコテラスで行っている環境に配慮した取り組みや児童にもできるエコな取り組みの紹介もあり、社会科の学習での理解を深めるだけでなく、他教科とのつながりを知ることができる施設であると感じた。



<清瀧寺・本田宗一郎ものづくり伝承館>

気賀小学校の教諭に、清瀧寺について解説をしていただいた。清瀧寺には、徳川家康の長男・徳川信康が祀られている。二俣城にて自刃した信康の葬儀をしたことで、清瀧寺の歴史が大きく変わったことや敷地内にある建造物などの特徴を教えていただいた。

本田宗一郎ものづくり伝承館には、本田宗一郎の生き方やものづくりの歴史がわかる年譜や写真、初期のバイクなどが展示されている。展示が多くあり、また図書スペースもあるため、児童にとって郷土の偉人について主体的に学ぶことができる施設であると感じた。

本研修を通して、地域の遺跡や文化財などを教材化することは、児童の学びを広げたり、深めたりすることに重要であることをあらためて感じた。



<内山真龍資料館>

職員の方に、内山真龍の生涯と業績について解説していただいた。真龍は現浜松市天竜区大谷に生まれ、21歳から名主を務めた。学問が好きだった真龍は、賀茂真淵に入門すると共に、浜松の渡辺蒙庵、本居宣長の弟子の田中道麿にも学んだ。日本書紀や遠州地域に伝わる風土の研究をし、名主として村の発展に力を注ぎ、国学の研究、発展に尽力した経歴を詳しく教えていただいた。また別館では、昔の農機具や林業に用いられた道具など、昔の生活や歴史に触れることができた。真龍に限らず浜松には様々な偉人がいる。今後も地域に貢献した偉人を学ぶことで、児童と共に郷土愛や文化への理解を深めていきたい。



<勝坂神楽（浜松市天竜区春野町）>

一般社団法人 College Impact Japan 様を招き、地域と祭礼のつながりや地域の祭礼がもっている可能性という視点から市指定無形民俗文化財「勝坂神楽」について解説していただいた。勝坂神楽とは、およそ 420 年前から地域住民が守り続けてきた祭礼であり、男性が化粧をし、女性の着物を身に着け、舞を奉納する。また、女人禁制で五穀豊穡、子孫繁栄を目的にしている。活動の様子を動画で見せていただき、地域の方も一緒になり、祭礼を行う様子が印象的だった。しかし、周辺地域の高齢化や若者の減少などから人手不足に陥り、今年度をもって勝坂神楽は閉会になるようだ。社会科学習の中では、祭礼の位置付けについて伝えることも重要であると感じた。



<遠州織物>

entrance 様、HUIS 様に浜松が世界に誇れる遠州織物について解説していただいた。「遠州織物は、高級シャツの生地の世界的生产地」と何度も伝えられていた。有名ブランド品が多く立ち並ぶイタリアでも、浜松の遠州織物はとても有名で、国外から見に来るデザイナーがいるそうだ。そのように良質な生地を作ることができるのは、浜松の地理的条件が織物づくりに適していたり、過去の人々が繋いできた技術や道具が優れていたりしていたからであると教えていただいた。出前講座等により、学校で児童が学ぶことができる環境も整えられているため、社会科や総合など教科横断的に学習に取り入れることができるだろう。



3 実践発表

「地域の人々の生活と関連付けて、 社会的事象の意味を見出す力を育てる授業の在り方」

中瀬小学校 教諭

中瀬小学校の教諭より、昨年度の実践が発表された。「地域の特色を生かして、人々の生活と関連付ける授業」「社会的事象の意味を見出す力を育てる授業」を手立てとして設定し、小学校3年生の「工場の仕事」での実践であり、以下の視点から整理されている。



<授業実践>

(1)地域の特色を生かして、人々の生活と関連付ける授業

①地域教材を生かした学習

第1時では、Google マップを活用して、中瀬地区はどのような工場があるかを調べたり、スーパーマーケットへの見学の際に浜松餃子コーナーに興味をもった児童がいたことを振り返ったりして、「石松餃子の工場働く人たちはどのような工夫や思いがあるのだろう」といった学習課題をまとめた。

②時事的事象を生かした学習

第2時では、実際に放送されていたテレビ番組や全国の餃子の消費量に関する新聞記事、新幹線浜松駅売店の土産品購入ランキングといった時事的事象にかかわる資料を用いて、意見交換を行い、学習計画を立てた。

③幅広い事象と結びつける学習

第3時では、石松餃子の中身について、パッケージの成分表示と実物を用いて調べた。餃子の写真からだけでなく、実物を用いることで、児童は意欲的に調べたり、材料の加工方法について新たな疑問をもったりすることにつながった。

(2) 社会的事象の意味を見出す力を育む学習

① オンライン学習システムを生かした学習

第4～6時では、写真や動画を用いて、二つの工場での作業内容や工場で働いている人の工夫を調べ、模造紙にまとめた。複数の資料から関心の高いものを選んだり、それぞれの資料を比較したりすることによって、二つの工場での作業工程には違いがあったり、作業のルールや服装の工夫に気付いたりすることができた。

② 現場で活用されている資料を生かす学習

第7時では、実際の石松餃子の工場の運送経路の資料から、商品が工場からどこに運ばれていくのかを調べた。資料から生産された餃子がサービスエリアに運ばれたり、通信販売されていたりすることに気づき、浜松市だけでなく、全国の人々に届いていることを理解することができた。

③ 側面掲示や思考ツールを活用した学習

第8時では、石松餃子に関わる人々の思いを思考ツール(Xチャート)で整理した。消費者だけでなく、生産者と運送者、販売者の思いを考えたり、単元のこれまでの学習を側面掲示で振り返ったりした。そして、それぞれ関連付けることで、「餃子をおいしくするためには、多くの人に関わっている」「感謝の気持ちを持って食べたい」などといった消費者としての思いをさらに深めることができた。

< 成果と課題 >

授業実践を通して、児童が他単元の学習問題を追究したり、解決したりする際に、社会的事象の意味について意欲的に調べる姿が見られるようになった。また学習したことを確認しながら、実生活において生かそうとする意識付けにもつながった。

(1) 地域の特色を生かして、人々の生活と関連付ける授業に関して

- 時事的事象に触れることで、餃子消費量日本一の街の起点の一つが自分たちの住んでいる地域であることを知り、誇りや愛着をもつことにつながった。
- 幅広い事象と結びつける視点を意識することで、今までに学んできた知識を生かして、学習に取り組もうとする姿勢が見られた。
- ▲ 実際に工場見学をすることができれば、自分たちが住んでいる地域により一層の愛着心をもったり、工場への関心を高めたりことにつながると考える。

(2) 社会的事象の意味を見出す力を育む学習に関して

- ICT機器を用いて動画や画像などの様々な情報を収集することで、社会的事象の仕組みや働きを深く理解することができた。
- 思考ツールを用いることで複数の視点と関連付けて、単元の学習目標の達成に近づけることができた。
- ▲ 現場の資料を活用する際、履修していない漢字や記号の意味が分からない内容もあり、児童の実態に合わせて資料を編集する必要があると感じた。

4 講話

「浜松市の文化財最新情報」

浜松市博物館 館長

浜松市の文化財についての講話があった。浜松市の旧石器時代の話から近代の話や浜松市の歴史文化の特徴などを豊富な知識をもとに説明があった。蜷塚博物館では、再調査を行なった。人骨からうなぎの骨が見つかり、縄文時代の人々も鰻を食べていることが分かるという新しい発見があった。目線を変えると、今までの常識が変わる一つの例だと感じた。

館長からは、「答えは一つではない。解釈は人それぞれにある。解釈の余地があることで、子供達は考えることの楽しさや面白さを実感できると思うので、この点を先生方には大切にしてほしい。」と話した。

